2024年11月10日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神様から逃げない

［エレミヤ書31章20節、31～34節］

エフライムはわたしのかけがえのない息子
喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに
わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り
わたしは彼を憐れまずにはいられないと
主は言われる。

見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

[1] エレミヤ書のクライマックス

　今日のエレミヤ書31章は、エレミヤ書のクライマックスとも言える箇所です。また、イザヤ書53章などと並んで、旧約の預言書の最高地点とも言われます。これまでエレミヤは、バビロン捕囚に陥る厳しい裁きの預言をずっと語ってきました。けれども、バビロン捕囚の苦しみを経験してからは、まるで逆転したかのような主の言葉を、エレミヤは預かって語っています。

31章の中から、まず、初めの方の部分も見ておきたいと思います。8～10節をお読みします。素晴らしい幻が語られています。「見よ、わたしは彼らを北の国から連れ戻し　地の果てから呼び集める。その中には目の見えない人も、歩けない人も
身ごもっている女も、臨月の女も共にいる。彼らは大いなる会衆となって帰って来る。彼らは泣きながら帰って来る。わたしは彼らを慰めながら導き 流れに沿って行かせる。彼らはまっすぐな道を行き、つまずくことはない。わたしはイスラエルの父となり エフライムはわたしの長子となる。諸国の民よ、主の言葉を聞け。遠くの島々に告げ知らせて言え。「イスラエルを散らした方は彼を集め 羊飼いが群れを守るように彼を守られる」。 これまで‟散らされた羊”だった者たちが、再び主なる羊飼いのもとに集められることが起こるのだと言うのです。そしてそれは「贖い」のわざ、つまり、新しい契約関係の開始だともいうのですね。11節ですが、「主はヤコブを解き放ち　彼にまさって強い者の手から贖われる」。

この歴史の大転換は、一体どういうことの始まりなのでしょうか？

31章28節。「かつて、彼らを抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらそうと見張っていたが、今、わたしは彼らを建て、また植えようと見張っている、と主は言われる」。また、31章32～33節。「わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。 しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す」。そして先週の30章22節にもありましたように「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」と、破れた関係の回復を一方的に宣言しています。何か唐突に思えるほどです。神様の中に何が変化があったのでしょうか？特にこの33節の「胸の中」や、「心」に授けられる新たな契約の内容について、エレミヤは続けてこう語ります。―「わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない」（31:34）。

[2] 「姦通の女性」にかけられた言葉

このエレミヤが語った 「あなたの罪に心を留めることはない」と言われた人物について、新約聖書の中ではこのような物語があります。それは、ヨハネによる福音書8章に記されている物語です。ちょっと思い出してみましょう。

「イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか」。イエスを試して、訴える口実を得るためにこう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」。そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」。女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

この女の人は、ある意味、何の言い訳もできない立場にありました。モーセの律法（レビ記20章）によると、姦通の罪というのは大変重かった。それは誰もが知っていたことでした。しかし本当ならば男性も同罪です。そこに引き出されなければいけない。けれどもここにも書いてある通り、これはどうもイエスを貶めるために、その女性は材料にされたようなものです。律法学者たちやファリサイ派の者にとっては、イエスは目の上のたんこぶで、ぎゃふんと言わせたかった。

「先生、この者に石を投げても良いですか、モーセの律法にはそう書いてありますが」と迫ったのです。恐らく普段のイエス様の振舞いから、きっとイエスは「投げよ」とは言わない、そう思っていたのでしょう。しかしそれでは神の律法を無視することになりますよね、どうします？先生様、と。ここに見えるのは二重の裁きです。この女性に対してと、イエス様に対してと。人間は、人を糾弾する時というのはどこか気持ちが良いのです。自分が神様になったような気にもなる。「文字（もんじ）」が独り歩きをすると、人間が死ぬのです。殺されるのです。これはある意味、旧約聖書の律法の限界です。それに対してイエス様はどうおっしゃったか。しばらくの沈黙の後、「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」とおっしゃいました。それは、‟あなたは神に成り代われるほどの人間のか？あなたは神様の前に全き存在なのか？”という問いでもありました。そしてこれこそが、エレミヤ書の語る「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す」ということなのではないでしょうか？心根が問われるのです。律法は本来、私たちを真の意味で裁き（抜き、壊し）、また、だからこそ、そこから神様と共に生きる生き方へと送り出す（植え、建てる）、そういう‟生ける言葉・権威ある言葉”と捉えられるものです。私たちは、「では、今、お前は神様の前にどうなのか」と問われるのです。ここで残念なのは、この女性一人だけ残されて、後は皆逃げてしまった、ということです。本当は逃げずに直ちに「間違っていました。傲慢でした」と言えたら良かった。ただ一人、逃げなかったのは、この女性でした。この女性は、イエス様が地面に何か書いておられる時に逃げ出すことも出来たと思います。しかし、何の申し開きもしていませんし、又、出来ないのです。私たちも、終末の日にこのように主の前に出されるのかもしれない。しかしその時に、ここで主イエスが言われた言葉を、自分自身に聴くのです。「わたしもあなたを罪に定めない」。これは、権威ある言葉です。人間にはこのような宣言は出来ません。これは、私たちを愛する、神様の「言葉」です。また神様の「行為」です！

[3] 罪とは、神様から逃げること

ところで、「姦通」というのは、裏切りのことですね。関わりの破壊です。旧約聖書では、他の神々にひかれていくことを「姦淫・姦通」と表現しています。ですからその罪を赦すということは、赦す側が、つまり傷つけられた側が、傷つけた者を受容するという、割に合わない行為です。お人よしではありせん。「痛み」を抱えながら、裏切り者を赦すということです。エレミヤ書31:20にはこのような主の言葉がありました。「エフライムはわたしのかけがえのない息子　喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに　わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り　わたしは彼を憐れまずにはいられないと　主は言われる」。この「胸は高鳴り」というのは、新しい訳では「彼のために、私のはらわたはもだえ」となっています。「はらわたがもだえる」、つまりもう内臓が制御できないほどわなわなとしてくる、辛くなり、痛みを持ち続けるということです。神様の愛とは、このような愛です。厳しい愛、切ない愛です。その後で、「わたしは彼を憐れまずにはいられない」と。　この愛を本当に受け止めた者は、これまでとは変わってくる筈です。ですから、主イエスはこの女の人に言いました。ヨハネ8:11。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」。この「これからは、もう罪を犯さないように」ということについて、ある説教者がこのようなことを語っていました。「誰でもまた罪を犯します。しかし、大事なのは、神様から逃げない、ということです。逃げるということが罪です。失敗しても逃げずに、何度でも何度でも立ち帰ればよいのです。それが救いです」と。ああ、そうなのだと思いました。神様は、この女の人を見捨てずに、一緒に留まってくれました。一緒に痛んでくれました。そしてこの人の罪を引き受けて、十字架で神様の罰を受けて下さいました。主イエスは心が高鳴り、そのはらわたがもだえていたからこそ私たちのためにいけにえとなりました。旧約の律法は、時にいのちが通わない、人を断罪するために用いられてしまいましたが、主イエスは、私たち罪人が何度でも立ち帰ってこられるように、憐みに身を焦がして、今も、御腕を拡げていて下さっているのです。これこそが、「新しい契約」＝「新約」の恵み、神様の愛の頂点だと思います。お祈り致します。

主なる神様、今、私たちは、罪人として主イエス様の前にあり、しかし、その主が贖い主、また弁護者として共にいて下さることに畏れを覚えます。あなたは、どこまでも私たちを失うまいとされるお方です。感謝します！どうか、そのあなたの熱い思い、また痛みを無視し、御前から自分へと逃げることがないようにして下さい。あなたは、いつも私たちに、どんな試練の中にあっても新しいあなたとの関係、人々との関係を作って下さいますから、望みを持って進んで行く力をもお与え下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。